

アジアと日本の キーワードは「民主主義」

政治と経済は 不可分の関係

3月19日、ライス米国務長官が来日した。ブッシュ政権2期目の新国務長官は、就任後初のアジア訪問に、インド、パキスタン、アフガニスタン、日本、韓国、中国の6か国を選んだ。多忙な駆け足の日程だったが、幸いにもお目にかかる機会を得、上智大学での講演にもうかがうことができた。

ライス長官のメッセージを私なりに理解すれば、これからのアジアでは政治における民主主義と経済自由化は不可分一体であり、それを明確にアメリカの対外戦略の基本に据える、ということだったように思う。

なぜ政治と経済は不可分なのか。ライス長官は講演の中でこう述べている。経済的な開放性（オープンネス）は人々の気概と繁栄を支え、政治的な開放性や自由の追求を強める。

けっきょくのところ、社会の物質的な豊かさは、政治的美徳（すなわち民主主義のこ

と）なしにはありえない。政治的開放性と経済的開放性を長く分離することは困難なのである。

今後、中国といえども、最終的には開放的で民意を代表する政府体制を受け入れなければ、グローバル化する世界の要請に応えていくことは難しい。

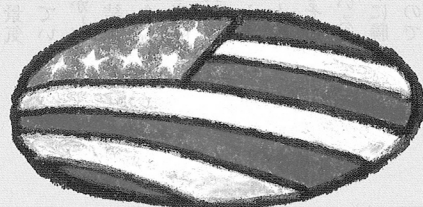
日米関係の基礎は 民主主義の共有

長官の話の中で私たち日本人が非常に注目しなければならぬ点の一つがある。日米の友好・同盟関係の基礎は民主主義という共通の地盤に立っていることにあるという考え方が繰り返し表明されている

のである。

「米国と日本は政治・経済的に開放的な共同体であることを受け入れた国である」「米国は民主国家日本を友人として持つことを光栄に思う」

だからこそ、「米国は日本の国連安全保障理事会の常任理事国入りをためらいなく支



Pato Yanagihara

持する」

北朝鮮問題にしてもイラクやアフガニスタンの問題にしても、世界的貧困や疫病との闘いの問題でも、「民主主義国家である日本」や民主的な日本国民と協力することが米国のとつても大きな力になっている、とも言おう。

多くのアジア諸国の民主主義はまだ若く脆弱であるが、それらの国を成功に導くことは、日本のようにアジアで民主主義を長く守ってきた国にとつても利益にかなうはずだ。

具体的な新たな日米協力の提案もあった。日米が援助政策で連携する「日米戦略的開発同盟」の構想である。日米は全世界の政府開発援助の40%を提供している。

これを協力して人権改善に熱心な国々に重点的に振り分けることで、それぞれの受け取り手には民主化や自由化、対外開放などを求めるというものである。

日本が停止を決めた対中円借款の振り向け先も視野に入ってきてよう。今回、アジアでの最初の歴史先となったインドは、民主主義の発展への期

待から重要度を増すことも考えられる。

こうした姿勢はブッシュ政権に特有なものか、もっと構造的なものか、議論はあるかもしれない。しかし、冷戦後の世界で各国はどのような将来を目指すのかという点が、これからも繰り返し問われることは確かだ。

自由主義対社会主義という相対立したイデオロギーの時代の次のパラダイムは何か。民主主義という価値がそこで重視されるのは必然の流れという感じもする。

そして、アジアの将来は、民主主義体制が各国にどこまで広く、深く浸透し定着するかによって大きく左右されることはまず間違いない。

一方、日本では民主主義はこれまで、どちらかというと所与のものとして扱われてきた印象がある。

一票の格差の問題、地方分権問題、さらには政権交代の可能性の問題など、日本の民主主義も課題を抱えていることを改めて認識することも大事だろう。

日本がアジアで最も伝統あ

る強固な民主主義国家であり続けることが、日米関係、アジアでの日本の国際的地位の基軸となる。もはや単なる国内問題ではない。

日本では憲法改正の議論が盛んだが、もう一度、日本にとって民主主義とは何かを見つめ直してみることも大事なのではないだろうか。

日本の民主主義をさらに発展させることは、国民が自分の国を大事に思い、将来を真剣に考えることにほかならないと思う。

そういう国であって初めて国際的な尊敬を得ることが可能となるのである。思い起こせばつい5年ほど前のクリントン政権の時代にあつては、日本に対して「Japan passing」ということさえ言われていた

のである。日本国民が自らをおろそかにし、民主主義を発展させなければ、いつまたその時代に逆戻りしないという保証はない。

若い世代への 大きな期待

ライス長官の印象は、「Tough, Cool, Elegant」(強

韌、冷静、優美)という前評判どおり、背筋をびんと伸ばし、理路整然と上手に相手と対話する方だった。

鍛え抜かれた政策のプロフェッショナルだと感じた。人種や性による差別を乗り越え、有能な人材をどんどん登用するアメリカの精神に見習う点が多いのではないだろうか。最近、日本では外資に対する警戒感を口にする向きも多いが、海外の優れた点をすなおに学ぶのは、本来、日本の強みである。

そのライス長官が今回、日本国民に語りかける場として、大学を選んだということは、日本の若い世代に特に期待しているという姿勢の現れではないかと思つた。

講演に出席していた学生の皆さんは熱心に長官の話に聴き入り、その後の確かな質問を投げかけ、活発な議論が展開された。たいへん頼もしく心強く感じた。

経済でも政治でも、日本は開放性（オープンネス）をどんどん強め、若い世代が新しい課題に挑戦できるようにしていくべきだろう。



早稲田大学大学院教授
川本裕子 Kawamoto Yuko